

精神看護学授業における病棟見学の効果

宇佐美 覚¹⁾ 山本 勝則²⁾ 坂口 禎男³⁾ 内海 滉³⁾

Effect of Visiting a Psychiatric Ward for Student Nurse in Psychiatric Nursing Class

Satoru USAMI Katsunori YAMAMOTO Sadao SAKAGUCHI Kou UTSUMI

要旨：精神科入院病棟を見学することは、患者の生活空間である治療的環境とその中にいる患者とを見学することとなり、授業理解に効果があるのではないかと考えた。授業が一回終了後毎に見学した6グループ、全授業が終了後に見学した1グループ、授業だけを受け見学していない1グループ、計8グループ（1グループ・9～12名）に対し、窓・デイルーム・電話に関する生活環境、保護室に関する項目の質問を行い、見学がどのように効果があるかを調査した。その結果、見学は学生に様々な影響を与え、望ましい学習効果がある場合と、方法次第で効果が異なる場合があることが示唆された。

キーワード：精神看護学・授業・病棟見学

Summary : Visiting a psychiatric ward consists of seeing patients as well as their environment. For the patients, the ward is not only a therapeutic environment, but where they live their daily lives. We thought that student nurses would understand the lectures about psychiatric nursing much better if they visited a psychiatric ward.

Eighty students were divided into eight groups. Six groups visited the ward once during the interval of the lectures, which consisted of seven sessions. One group went to the ward after all the sessions, and the eighth group did not visit the ward. The student nurses were required to take a quiz about the windows of the ward, the day room, telephone, and the seclusion room after all sessions. We compared the quiz scores across the groups.

The result showed that visiting a psychiatric ward enabled student nurses to better understand the lectures about psychiatric nursing. However, the effect depended on whether or not students saw patients in the seclusion room and conversed with patients. Students who saw the seclusion rooms with patients and talked with patients scored highest on the quiz. Students were more influenced by first-hand experience than by faculty or ward staff explanations.

Keywords : psychiatric nursing, class, visiting a psychiatric ward

はじめに

精神看護における授業は、精神病そのものに対する説明が困難であり、CT・MRIなどの検査においても、またその他の検査数値結果においても説明できない。したがってそのような病気を持つ患者の看護を説明する場合にも、その必然性をわかりやすく学生に伝えることに苦慮するものが多い。また患者の生活空間である治療的環境の精神科病棟の特徴についても、学生は頭で理解するしかない。つまり学生にとっては、精神看護が抽象的・非現実的で捉えにくく、理解に苦しむこととなる。このような問題に対しての一つの試みと

して、野澤らは、ビデオ学習を導入している。しかし精神病患者やその看護をよりリアルに感じさせるためには、実際の入院環境を体験することが望ましいと思われる。

そのため授業と平行して、一回の授業が終了後毎に、グループ毎に実際に精神科入院病棟、開放病棟・閉鎖病棟の見学を行った。見学することにより、患者の生活空間である治療的環境の病棟を、いくらかでも理解できるのではないかと考えた。また病棟を見学することは、その中にいる患者をも見学してくることとなり、それによりさらに授業に対する理解が得られるのではないかと考えた。

看護学科 1) 講師 2) 秋田大学医療技術短期大学部看護学科助手 3) 千葉大学教授

本研究は、第24回日本看護研究学会学術集会において発表したものに加筆したものである。

今回は、授業の途中で見学を行ったグループ（途中群）と、授業が全て終了後に見学を行ったグループ（終了群）と、授業だけを受け見学していないグループ（受講のみ群）との間に、精神病棟見学が効果があるかを調査検討した。

研究方法

1. 対象

A短期大学看護学科、精神看護学受講中・受講後に病棟見学した学生と、受講のみの学生、二年生計80名。

2. 調査・分析方法

精神看護学授業が一回終了毎に1グループ・9～12名で入院病棟を見学した。調査は、授業の途中で見学を行った（途中群）6グループ、授業が全て終了後に見学を行った（終了群）1グループ、授業だけを受け見学していない（受講のみ群）1グループ、計三群に対し質問紙調査を行った。

質問は、窓・デイルーム・電話に関する生活環境、および保護室に関する項目、計6項目の設問について行った。

質問紙の回答を「正解」を1, 「不正解」を0として数量化し、授業の途中で見学を行ったグループ（途中群）・授業が全て終了後に見学を行ったグループ（終了群）・授業だけを受け見学していないグループ（受講のみ群）の三群に分散分析を行った。また授業の途中で見学を行ったグループ（途中群）と授業が全て終了後に見学を行ったグループ（終了群）に、授業が全て終了後に見学を行ったグループ（終了群）と授業だけを受け見学していないグループ（受講のみ群）にt検定を行い、比較検討した。

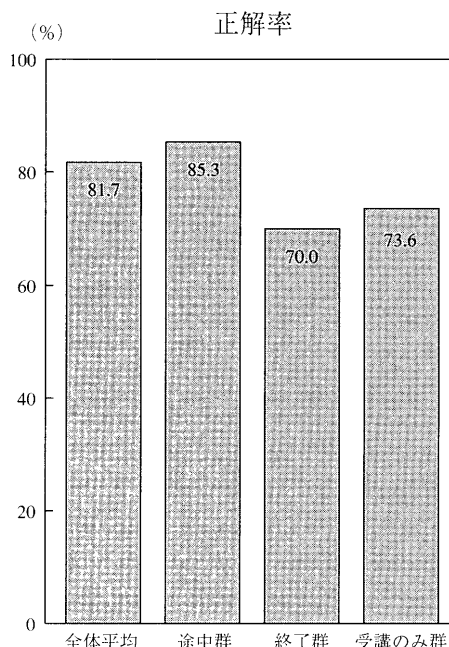
質問内容は以下の通りである。質問項目の前のカッコ内の丸は、正しい叙述であり、ばつは、正しくない叙述を示している。

- (×) ①精神科の入院病棟の窓は、飛び降り事故防止のため開かないようになっている。
- (×) ②入院中のほとんどの患者は病室に閉じこもり、デイルームなどには出てこない。
- (×) ③妄想に左右されて頻回に電話する患者もいるため、閉鎖病棟の中に電話は設置されていない。
- (○) ④保護室に入っている患者は、病状により時間開放される場合がある。
- (×) ⑤保護室に入っている患者は、保護室の出入りは原則的に自由である。

(○) ⑥保護室に入っている患者は、24時間その中で過ごすことになる。

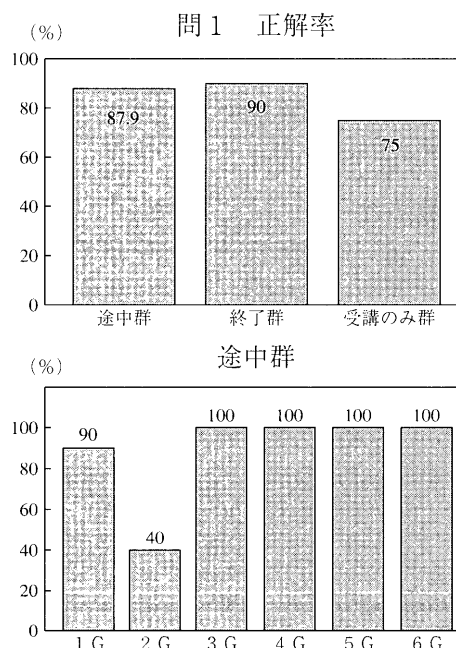
結果・考察

(図1)



群全体の正解率は81.7%であった。各群別正解率は、（途中群）が85.3%、（終了群）が70%であり、（受講のみ群）は73.6%であり、各群において有意差は認められなかった。そこで各設問について比較検討した。

(図2)



図における途中群のGはグループを表しており、1から6までのグループの番号は見学の順番に一致している。

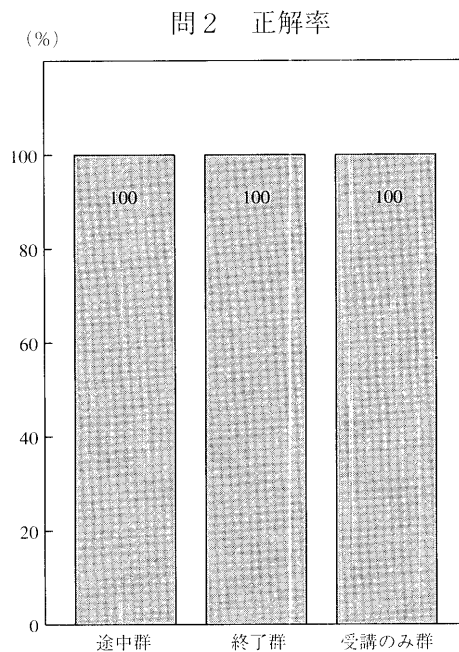
①「精神科の入院病棟の窓は、飛び降り事故防止のため開かないようになっている。」という内容である。

群別では（途中群）が87.9%、（終了群）が90%であり、（受講のみ群）は75%であり、各群において有意差は認められなかった。

これは見学時において、身体が入り込めない程度の開閉ではあるが、実際に病室の窓を開閉し、開放感・換気などについて説明しており、その成果が（受講のみ群）と差がついたと考えられた。

（途中群）については第1・2グループが正解率が低く、このグループは授業の初期における見学グループでもあり患者を強く意識しての見学であったこと、また学生同士の情報交換がなかったことが考えられた。なにも情報がなかった初期グループは、不安・緊張が強く余裕のない見学になってしまったことが原因と思われた。さらに7つのグループが見学を終了してから質問紙調査を行ったため、見学してから調査までの期間が長すぎたことも、正解率低下の要因になったとも思われた。

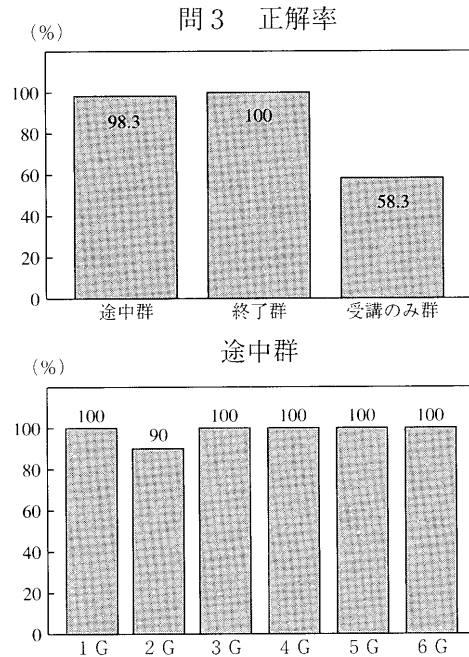
(図3)



②「入院中のほとんどの患者は病室に閉じこもり、ディルムなどには出てこない。」という内容である。

全群100%の正解であった。つまりこの設問については、授業での理解で十分だったのではないかとと思われる。

(図4)



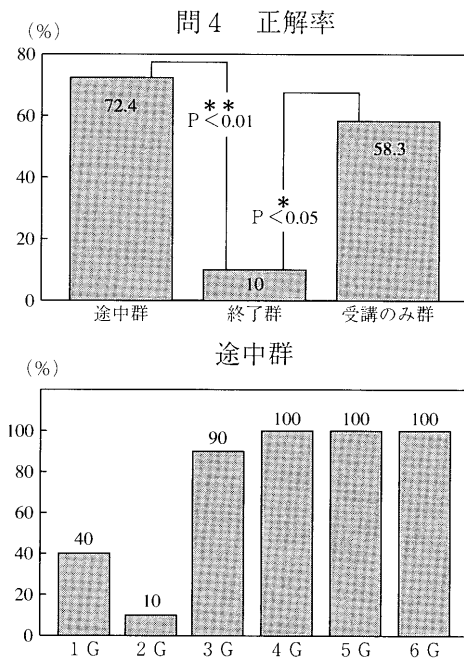
③「妄想に左右されて頻回に電話する患者もいるため、閉鎖病棟の中に電話は設置されていない。」という内容である。

群別には、（途中群）が98.3%、（終了群）が100%であり、（受講のみ群）は58.3%で、三群間に危険率1%以下で有意差が認められた。

これは見学時において、精神保健福祉法において義務づけられている電話の設置、電話のそばに人権擁護委員会の電話番号などを記したものを明示しているのを見学しており、それが効果として認められたと考えられる。この問は見学の効果が明確に現れ、この設問については、授業だけでなく病棟の見学を学習として取り入れることが望ましいと思われる。

途中群においてはグループ間で差は認められなかった。

(図5)



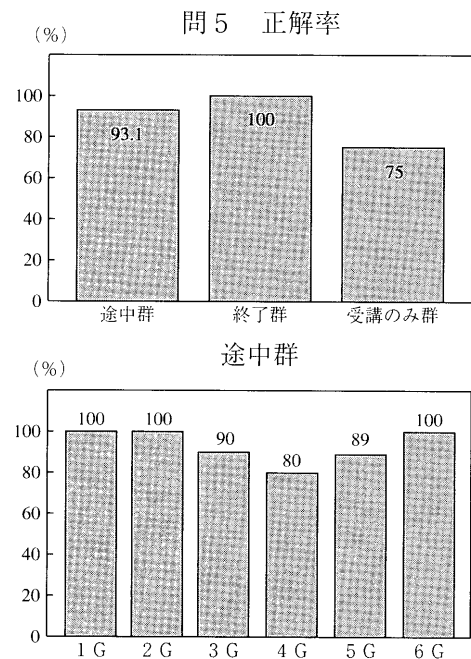
④「保護室に入っている患者は、病状により時間開放される場合がある。」という内容である。

群別には、(途中群)が72.4%、(終了群)が10%であり、(受講のみ群)は58.3%で、三群間に危険率1%以下、および途中群と終了群において危険率1%以下で有意差が認められた。終了群と受講のみ群においては、危険率5%以下で有意差が認められた。

これは途中群においては、実際に保護室に入っている患者が時間開放されているところを見学しており、その成果が見学の効果として認められたと考えられる。これに対して終了群の値が低かったのは、見学時において保護室を患者が使用しており、実際に保護室内を見学できなかったこと、また保護室という特殊な環境の中に患者がいたため、より以上に不安・緊張が強く余裕がなかったことが考えられた。

途中群においては第1・2グループが正解率が低く、①でも述べたが、さらに特殊な環境に対し反応を示したことが原因と思われる。

(図6)

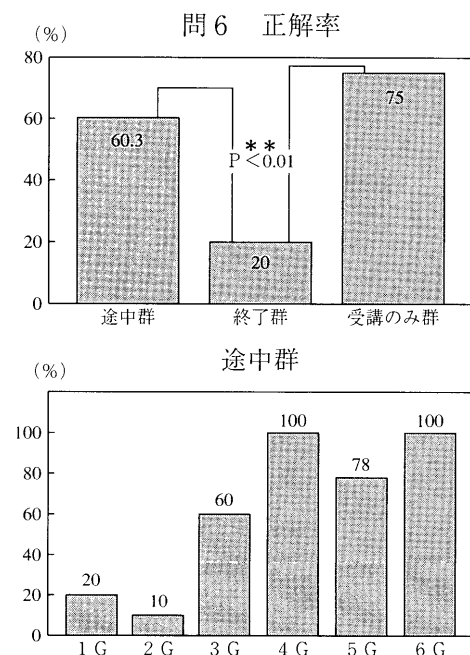


⑤「保護室に入っている患者は、保護室の出入りは原則的に自由である。」という内容である。

群別には、(途中群)が93.1%、(終了群)が100%であり、(受講のみ群)は75%で、有意差は認められなかった。しかし見学時において、精神保健福祉法による保護室使用規則の説明を受け、見学との関わりの中で効果をもたらしたものと思われる。

途中群においてはグループ間で差は認められなかった。

(図7)



⑥「保護室に入っている患者は、24時間その中で過ごすことになる。」という内容である。

群別には、(途中群)が60.3%、(終了群)が20%、(受講のみ群)は75%で、三群間に危険率5%以下、途中群と終了群において、また終了群と受講のみ群において、危険率1%以下で有意差が認められた。

これは途中群においては、保護室を時間開放されている患者を見学したことがイメージとして残ったものと思われ、また終了群においては、保護室見学時において患者が入室しており不安・緊張が強かったためと思われる。この設問においては見学の効果がマイナスになってしまったと思われる。見学がきわめてインパクトが強いものであるかということを示唆するものと思われた。

途中群においては第1・2・3グループの正解率が低く、第1・2グループに関しては①でも述べたが、また第3グループと同様に、保護室を時間開放されている患者を見学したことがイメージとして残ったものと思われる。

結 論

1. 見学は、授業に対する理解が得られ、授業に効果をもたらす。
2. 見学は全てのグループに関して、強烈なインパクトがあり、時によりそれは授業理解にマイナスに作用する。

以上のことより、見学は学生に様々な影響を与え、望ましい学習効果がある場合と、方法次第で効果が異なる場合があることが示唆された。また見学時に影響を与えただろうと思われる、学生の不安・緊張については今後の課題としたい。

参考文献

- 1) 清水順三郎：新版看護学全書第36巻精神看護学 1・2 メヂカルフレンド社 1997
- 2) 岩瀬 信夫：精神看護学の一教育現場から看護展望1996-2・vol,21no,3 メヂカルフレンド社
- 3) 藤岡 完治：臨地実習教育の授業としての成立看護教育1996-2 医学書院
- 4) 武井 麻子：精神看護学実習で起こること看護教育1997-3 医学書院
- 5) 清水 恵子：精神看護学実習の「奥行き」と「広がり」 看護教育1997-3 医学書院
- 6) 内海 滉：看護研究のためのやさしい統計学 医学書院 1995

7) 宇佐美 覚他：精神看護学教育の一環としての精神病棟見学 日本応用心理学会 1997

8) 野澤由美 他：精神看護の場と対象理解のための自作VTRの評価 ～臨床実習の導入に活用して～日本看護研究学会 1998